第６課　創造主を礼拝せよ

【暗唱聖句】

「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。」イザヤ58：6，7

【日曜日・偶像礼拝と抑圧】

神様は十戒において、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない」（出エジプト20：3，4）とお命じになりました。民たちはこれに同意し神の民として生きることを約束しました。エジプトから奇跡をもって脱出させ、奴隷生活から解放してくださった神様に従って行くことは当然のことに思われました。ところが、その後モーセが山に登ったきり降りてこないと、あっさりと神様との約束を破り、金の子牛の像を作って捧げものをし、その前で戯れたのでした。モーセの命がけのとりなしがなければ、民たちはそこで滅ぼされてもおかしくはありませんでした。その後も、彼らにとって偶像礼拝は大きな誘惑でした。真実の創造主なる神様だけを伏し拝むこと、これは最終時代の我々に対するメッセージでもあります。

「偶像を造り、それに依り頼む者は皆、偶像と同じようになる」詩編115編8節

偶像（偽の神）により頼む者は例外なく、その偶像と同じような人間になっていきます。人は触れた者に似ると言いますが、偶像礼拝も同じです。弱者に対する愛は、偶像の中にはありません。しかし、愛の神様にいつも触れているならば、神様の愛と憐みの心が、わたしたち一人一人の心となっていくのです。

【月曜日・礼拝する理由】

聖書は繰り返し、神様を礼拝するようにと教えています。しかし、なぜわたしたちは神様を礼拝するのでしょうか。それは神様の愛と憐みと正義を忘れないためであり、常に讃美と感謝をささげるためです。礼拝を通して神様に触れて喜びと力に満たされ、また願いを捧げることができます。

「とこしえにまことを守られる主は、虐げられている人のために裁きをし、飢えている人にパンをお与えになる。主は捕われ人を解き放ち、主は見えない人の目を開き、主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し、主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる。主はとこしえに王。シオンよ、あなたの神は代々に王。ハレルヤ」詩篇146：6～10

神様がどういうお方なのかということを瞑想するとき、それだけで十分神様を礼拝する理由があることがわかります。またイスラエルの民は何年経っても出エジプトの出来事を思い出し、それが礼拝の動機となっていったように、わたしたちも神様に救われた過去の出来事を思い返しては、賛美と感謝を捧げていくことも大切です。

【火曜日・信心深い圧政者たち】

「お前たちのささげる多くのいけにえがわたしにとって何になろうか、と主は言われる。」イザヤ書1章 11節

「わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。祭りの献げ物の香りも喜ばない」アモス書5章 21節

信心深く、燔祭を捧げても、それは何の意味もないと主は言われます。それは彼らが弱い者たちを顧みることがないからです。弱く貧しい人々の声が、彼らには届きません。神様に仕える身であっても、神様の声も全く届いていないのです。そのため預言者は、彼らの宗教的行為を皮肉るかのように、何の意味もないことを行っている。神様はそれを喜ばないとはっきり語っています。わたしたちもどれだけ安息日を守り、献金を捧げ、奉仕したとしても、愛を憐れみの心を失ってしまっていては、意味がないのだということを覚えたいと思います。

【水曜日・礼拝の仕方】

「彼らが日々わたしを尋ね求め、わたしの道を知ろうと望むように。恵みの業を行い、神の裁きを捨てない民として彼らがわたしの正しい裁きを尋ね、神に近くあることを望むように」イザヤ58：2

イザヤ58章において神様が私たちに望んでおられることは、①日々主を尋ね求めること、②主の道を知ろうと望むこと、③恵みの業を行うこと、④主の正しい裁きを尋ねること、⑤主に近くあることを望むことです。神様は裁き主であること忘れることなく、常に神様の御心の道を探り求め、神様から離れないで恵みの業を行うこと、このことを大切にしなければなりません。

「見よ、お前たちは断食しながら争いといさかいを起こし、神に逆らって、こぶしを振るう。お前たちが今しているような断食によってはお前たちの声が天で聞かれることはない」イザヤ書58章 4節

いくら苦しい断食を行ったとしても、いらいらしたり、弱い者たちを虐げていたりすれば、神様に声が届くことはありません。

「わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて、虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまない…そうすれば…あなたの光は、闇の中に輝き出で／あなたを包む闇は、真昼のようになる」イザヤ58：6，7～10

神様が望まれる断食（礼拝）は、悪による束縛を断ち、虐げられた人を解放し、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れるなど、弱い人にやさしくすることだと言います。このような愛の行為は、実は神様への礼拝行為そのものなのです。そして、そのとき光が輝き、闇を真昼のようになるのです。

　また、「安息日に…したい事をするのをやめるなら、主を喜びとする」（イザヤ58：14）ことができると、憐み深い活動を安息日と結びつけて、喜びに溢れた生活が与えられることを教えています。

【木曜日・憐みと忠実さ】

イエス様が罪びとたちと一緒に食事をしていたとき、宗教指導者たちをそれを批判しました。その際にイエス様は、「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」（マタイ9：13）と、ホセア6：6の言葉から引用してお答えになっています。また「（律法学者は」やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる」（マルコ 12章40節）とも言っています。イエス様は憐みや慈しみの心がいかに大切であるか、それはいけにえを捧げるような犠牲の伴う礼拝行為よりももっと大切なことなのだと教えられているのは明らかです。これは当時に偽善的な宗教指導者たちに対して言われたのですが、私たちもこのことを忘れてはなりません。わたしたちは貧しい人たちに対して、教会の敷居を高く感じさせて、「天の国を閉ざす」ようなことがあってはなりません。